中国古典概説授業について

公開授業者　国語教育専修・太田　亨
参　観　者　国語教育専修・福田安典

本授業では、中国の先秦時代から唐代における文学について、その概要を解説するものである。

まず授業全体の構成についてみてみる。先秦時代では最古の詩集であり、五経の一つである『詩経』について、作品「碩鼠」を例に取り上げ解説した。続いて戦国時代に楚の国で詠われた歌を集めた『楚辞』について、「漁父辞」を例に取り上げ特徴を説明した。漢代では司馬遷が著した正史の最初となる『史記』について、「管鮑の交わり」と「張儀の舌」を取り上げた。また建安文学として、曹操の「短歌行」、曹丕の「七歩詩」を取り上げた。六朝時代では田園詩人として有名な陶淵明について、「責子」「飲酒其五」を取り上げた。唐代では詩が最も隆盛を極め、その中心人物である李白と杜甫について、李白「月下独酌」「秋浦歌」「山中問答」・杜甫「登高」を取り上げた。時代ごとに文学の特徴は変化しているため、まずその時代の文学の特徴と背景を解説した。その上で代表的な作品を取り上げ、そこに認められる特徴を指摘した。いずれの作品も戦後において教科書に取り上げられた作品であり、日本への影響が強いものである。

公開授業の内容は、唐代の文学についてである。漢代の散文、唐代の詩、宋代の詞、明代の小説が有名であり、唐代に多くの優れた詩が創出されている。唐代の中でも、初唐・盛唐・中唐・晩唐に区分され、初唐では近体詩の形式が確立され、盛唐では形式の精度が一層高まり内容が充実する。中唐では盛唐よりは劣るも詩人・詩数が増大し、晩唐では国が崩壊するに伴い国を憂える内容の作品が多くなる。さらに盛唐の中でも李白と杜甫は別格の存在であり、「詩仙」「詩聖」と呼ばれていることを解説した。次いで、盛唐はおろか、中国を代表する詩人・李白について、その略歴・性格から解説した。李白の出身は定かではないが、自ら「青蓮居士」と称していることから青蓮郷に住していた。詩を認められ中央の官職に就くも、天子に悪態を付き追放されてしまう。その後、杜甫と交友があり、お互い詩をやりとりしている。李白は早くからその詩を高く評価され、その特徴として、第一に酒を好み世を卓越した内容を詠み込む点、第二に誇張表現を用いる点、第三に精度の高い絶句を完成させた点が挙げられる。第一の特徴を確認するために「月下独酌」を読解した。訓点付きの作品プリントを配布し、まず書き下し文にさせ、味わうように指示した。二十二句の古体詩、月と影と一緒に酒を飲むという内容なので、段落の構成、段落毎の内容を丁寧に解説し、李白の特徴を確認した。その後、残りの時間で李白の詩についてどのように感じたか、その感想を書かせた。授業後、学生の感想を読んでみると、「これまで李白の詩の特徴を理解した上でその詩を読んだことがなかった」「李白の人生や性格を初めて知った」「李白の酒の飲み方、その豪放磊楽な性格に驚いた」といった感想が多々見られた。

公開授業の流れは以上である。授業後、参観者と授業について意見を交換した。参観者より次のような意見をいただいた。

１、教科書を用いて授業を進めた方が効率が良いのではないか。

２、DVD等の映像を利用して学生により分かり易い資料を提示した方が良いのではないか。

３、国語教育専修の必須科目であるので、今後もそのことを意識して授業作りを行ってほしい。

以上三点が参観者の意見である。この参観者の意見を参考にして、授業者としての感想と意見を述べてみたい。

１については、授業者も最適な本を探しているところである。教科書があれば、授業で取り上げる

作品以外にも多くの作品に触れることができ、学生にとっても予習がしやすいと言える。できれば時代毎に羅列してあるものよりも、ジャンル毎に作品が取り上げられているものが良いであろう。ただ現在学生にとって読みやすく、適度な解説が載っているもの、最適な作品が載っているものが無い。授業者の方でより適切な資料を作っていくことが必要になる。

２であるが、映像を用いて、学生により鮮明なイメージを与えることは必要である。日本にはない世界を見せることは、今後の学生にとって有益となろう。授業後、すでに『漢詩紀行』・『中国大紀行』を購入した。後期からは折りに触れて映像を紹介していくつもりである。

３であるが、現在の漢文教育の大きな問題である。昨今、国語の教員免許に必要な漢文の単位は最低２単位である。限られた授業の中で、漢文教育に必要な事項をなるべく多く解説しなければいけない。今回の授業では文学に偏っている感を受けるため、思想の面にも気を配る必要があるだろう。

公開授業に関して、以上のような感想・課題が見えた。次に、全授業を終えた感想と今後の課題について述べてみたい。

毎回授業の中でプリントを配布し、学生に訓読漢文を書き下し文に改めさせるのであるが、皆一様にこの作業は良くできる。しかし、内容理解にはいると極端に抵抗感を感じているようであった。これは、中・高の漢文教育に原因があるように思われる。現在の国語における漢文授業数は減少の一途をたどっている。少ない中で必須の事項を教授せねばならず、現場では様々な工夫がなされている。ただ、どうしても学生自身が深く考え、字の中から意味を導き出そうとすることまでは及ばないようである。今後は作品をなるべく深く味わえるように、授業の進め方を工夫していきたいと考えている。

次いで、高校までに習う詩人や文人の名前、詩や文の形式、作品の題名等はよく知っているが、それがいつの時代に作られ、どのような特徴があるか全く知らないのに驚かされた。先述の授業時間数の問題に起因していると思われるが、この点についても、なるべく日本の歴史と比較しながら、時代の感覚をつかませ、公開授業の意見にあるようにＤＶＤ等を見せながら、背景にある映像を思い描くことができるようにさせたい。

授業者が行った授業は、赴任して、今年度始めて担当した授業である。今回の公開授業を行ったおかげで、これからの方向性が見えてきた。また、全体を通じて、漢文教育について考えさせられた点も多々存する。このようにして出てきた課題を少しでも多く今後の授業に反映させていきたいと考えている。